川崎医療福祉学会誌　Vol. 21　No. 1　2011　127 − 133

短　報

大学生の対人的疎外感と昼食行動

荒川裕美子[*1]　吉田浩子[*2]

1．はじめに

2009年7月，朝日新聞の夕刊に友達がいない大学生がトイレで食事をする，いわゆる「便所飯」をするという記事が掲載され話題になった[1]．この行動について，和田[2]は「便所飯をする学生の心理は友達がいないのが嫌ではなく，一人で昼食を食べている姿を見られるのを何よりも嫌っている」と記している．かつて，町澤[3]は学校や職場で1人で食事する姿を見られないように隠れて食事を取る現象を「ランチメイト症候群」と呼んだ．この現象の延長戦上に，この大学生の「便所飯」があると考えることができる．吉田[4]は，2007年に大学生の昼食行動と友人関係について質問紙調査を実施し，その結果から，調査対象者全体（529人）の9割以上がいつも行動を共にしている友人（以下グループ）と昼食をとっていること，自分のグループのメンバーに「満足していない」と回答した学生ほど，昼食をともにする友人に対し極度に気をつかい，儀礼的な行為（「全員が揃ってから食べ始める」など）をきちんと行う傾向があることを明らかにした．さらに，町澤[3]が指摘したように，彼らは「自分が排他されていると他者に認識されること」を極端に嫌う傾向があった．

これらのことから，大学生の昼食行動は「自分が疎外されていると他の学生に思われることを嫌う」情動と関連していると推測できる．疎外感とは「集団生活や社会生活の中で自分が他者から排除されている，あるいは，他者との間に距離感・違和感を感じ，どうしてもなじめない，溶け込めないという認知的感情」と定義される[5]．宮下・小林[5]は，Schimek&Meyer[6]の研究を参考に，この疎外感を「対人的疎外感」，「社会的疎外感」および「自己疎外感」の3つの下位概念に分類した．その中でも「対人的関わりの中で生ずる孤独感及び不信感」を示す「対人的疎外感」は，学校生活のグループにおいて生じる「理解されていない感じ」，「1人ぼっちな感じ」，「疎外されている感じ」，「気詰まりな感じ」などの否定的な感情と類似していると指摘されている[7]．そして杉浦[7]は，宮下・小林[5]が作成した疎外感尺度項目のうち，対人的疎外感と思われる「孤独感」因子および「圧迫拘束感」（社会や周囲の圧力による拘束感）因子を抽出，さらに女子大学生へのインタビューや，中学生・高校生・大学生を対象とした集合調査を実施し，「自分らしさを出せない，自分らしさを理解されていない」ことを表す項目を加えた合計21項目の対人的疎外感尺度を作成した．

この「対人的疎外感」は大学生の昼食行動にも影響してくると思われるが，このような推察は，新聞記事に見られるように，限られた臨床的知見や狭い範囲での観察を基に直感的に語られることが多く，定量的な調査はほとんどされていない．

昨今では，高校生までの発達課題を達成することができないまま大学に入学した学生や，友人や家族との対人関係，さらに大学生活における不安の増大に起因する大学不適応を示す大学生の増加が指摘されており[8]，多くの大学が彼らの学生生活への適応を促すためのより有効な学生支援プログラムのあり方を模索している．「トイレで昼食をとる」大学生の存在そのものが，このような支援の必要性を裏付けているとも言えるが，確立された支援プログラムはまだない．そのため，大学生の昼食行動に限らず，彼らの学内における行動やそれに関連する心理的背景について定量的，客観的なデータを蓄積することが，彼らの大学生活への適応を促すためのより良い支援の在り方を考える上で喫緊の課題である．

そこで，本研究では，最終的に大学生の大学生活への適応を促進するためのより効果的な取り組みを

*1 久留米大学　文学部　社会福祉学科　*2 総合人間科学大学　保健医療学部　看護学科
（連絡先）荒川裕美子　〒839－8502　福岡県久留米市御井町1635　久留米大学
E－Mail：arakawa_yumiko@kurume-u.ac.jp

構築するための手がかりを得ることを目指し，彼らの集団としての実態を把握することを目的に，大学生の学内における昼食行動の実際と対人的疎外感の程度の関連を知るための質問紙調査を実施した．得られた結果の分析から，彼らの昼食行動と疎外感の関連について考察した．なお，本研究では，宮下・小林[5]，杉浦[7]らと同様に「社会や周囲の人との関係の中で生じる疎外感（否定的感情）」を「対人的疎外感」と定義した．

2．調査方法

2009年7月にX大学の大学1年次生を対象に予備調査を実施，予備調査結果を参考に本調査用紙を作成し，同年11月に本調査を実施した．具体的には，講義担当者の許可が得られた講義の終了後，講義受講者に質問紙用紙を配布，本研究の目的および回答の方法について口頭および書面で教示した．調査の説明を十分に理解し，同意が得られた場合のみ質問紙に回答することとし，質問紙の記入により研究協力の同意を得たものと判断した．その際，質問紙に未記入であっても何等不利益はないことを教示した．質問内容は，大学内における友人関係に関する質問（大学内の友人における昼食行動，「グループ（現在，大学内で行動を共にしている自然発生的集団で，学年と学科の同じ人の集まり[4]」に帰属しているか，グループに帰属している理由）と，杉浦[7]が作成した対人的疎外感尺度に示された21項目であった（表1）．

調査の結果，484人の回答を回収した．無回答，記入もれの等の不備を除き，最終的に総計335名（男子95名，女子240名）のアンケートを有効回答とした（有効回答率69.2%）．統計処理にはPASW Statistics 18を使用した．

表１　対人的疎外感尺度項目

1. 自分の居場所がないように感じる
2. 私はひとりぼっちであると感じることがよくある
3. 何かに縛られ自由に動けないようだ
4. 本当の自分を理解されているように感じる
5. 何かに追いつめられているような感じをよく持つ
6. うちとけて話ができる人は私にはあまりいないように思う
7. 私には本当に理解し合える人はほとんどいないように思う
8. 自分はやさしい人々に囲まれて決して一人ではないと思う
9. みんなが冷たい目で私を見ているようだ
10. 何かにせきたてられて生きている感じがする
11. 何か言っても無視されることが多いようだ
12. あるがままの自分をだせない
13. 私の毎日は実にのびのびしているように思う
14. 私を認めてくれている人はいないようだ
15. 毎日が緊張の連続で息苦しさを感ずることもある
16. 他人に気兼ねして自分のやりたいことができない
17. 私は他人からあまり信頼されていないようだ
18. みんないつも温かい心で私を迎え入れてくれるように思う
19. 自分がしたくないことをさせられているとよく感じる
20. わけもなく疲労を感じることがしばしばある
21. 悩み等を話せる友人がいない

杉浦[7]が作成した対人的疎外感尺度21項目を示した．

3．調査結果

3．1　調査対象者の友人関係

調査対象者335人（男子学生95人，女子学生240人）のうち，全体の92%（307人）が「特定のグループに帰属している」と回答した．「グループに帰属している」と回答した学生307人（92%）にその理由を尋ねた（10項目　複数回答可）．その結果，半数以上の学生が，帰属する理由として「学校生活が楽しくなるため」76%（233人），「相談がしやすいため」59%（180人），「安心して何でも話せるため」52%（161人）を選択した．他の項目では，選択した人数の割合が多い順に，「落ち込んだりしても支えてもらえるため」48%（147人），「相談相手がいて頼りになるため」45%（137人），「ひとりぼっちにみられたくないため」24%（75人），「浮かないようにするため」20%（60人），「つまらない人に見られないようにするため」13%（39人），「変わった人に見られないようにするため」10%（30人），「その他」5%（10人）であった．項目を選択した人数の割合に有意な性差が見られた項目は，「落ち込んだりしても支えてもらえるため」のみで，この項目を選択した学生全体の人数（147人）に対する女子学生に人数の割合（81%）が男子学生（19%）に比べ有意に高かった（$\chi^2=7.636$，$p<.05$）．

3．2　調査対象者の昼食行動

彼らの昼食行動を調べた．調査対象者全体の97%（325人）が，「（大学構内では）誰かと一緒に昼食を食べる」と回答し，そのうち95%（310人）の学生の「昼食を一緒に食べる相手」は「同じグループの友人」と答えた（「同じグループの友人」，「偶然居合わせた知り合い」，「交際相手」，「そ

の他」の項目の中からあてはまるものをひとつ選択）．さらに，彼らに「昼食を他者と一緒に食べる理由」について尋ねた結果（5項目複数回答可），82%（266人）が「人と話しながら食べるのが楽しいから」と回答したが，8%（27人）が「ひとり取り残されるのが心細いから」，5%（16人）が「グループの輪から取り残されたくない」，1%（3人）が「仕方ないから」，4%（13人）が「その他」を選択した．これら「誰かと一緒に昼食を食べる」と回答した学生に，彼らの昼食行動の詳細を尋ねた（6項目 複数回答可）．選択した人数の割合が多い順に「自分が食べ終わっても相手が食べていたら片付けないで待つ」86%（180人），「昼食を一緒に食べる相手が席に着くまで食べるのを待つ」50%（169人），「相手と話しながら食べるように気を遣う」36%（118人），「昼食を食べる場所はいつも一緒に食べる相手に決めてもらう」16%（52人），「常に昼食を一緒に食べる相手と一緒に行動する」13%（42人），「昼食を一緒に食べる相手と似たようなものを食べる」8%（26人），「その他」6%（20人）だった．また，「一人で昼食を食べたことがある」と回答した学生は全体の70%（236人）だった．これらすべての設問において，各回答を選択した人数の割合に有意な性差は見られなかった．

3．3　調査対象者の対人的疎外感

杉浦[7]は，宮下・小林[5]が作成した疎外感尺度を改正し，中学生・高校生・大学生の計1127人を対象に彼らの対人的疎外感について集合調査を実施，α係数を算出したところα=0.93と高い信頼性が得られ，新たに合計21項目の対人的疎外感尺度を作成した．本調査ではこの杉浦[7]の対人的疎外感尺度を用い，調査対象者の対人的疎外感を調べた．

調査から調査対象者全体（335人）の対人的疎外感尺度得点の平均値は50.18点（標準偏差13.75）であった．この得点の平均値に有意な性差は見られなかった．

3．4　調査対象者の友人関係と対人的疎外感の関連

調査対象者の友人関係を示す質問項目において選択した回答間で，対人的疎外感尺度得点の平均値に有意に差が見られたものを表2に示した．

「特定のグループに帰属している」学生の対人的疎外感尺度の平均値（49.74点）が「特定のグループに帰属していない」学生（55.07点）に比べ有意に低かった（t=1.974，p<0.5）．また，グループに帰属する理由として積極的理由を選択した学生の対人的疎外感尺度得点の平均値は，選択しなかった学生に比べ有意に低く，反対に消極的理由を選択した学生の平均値は選択しなかった学生に比べ有意に高いことがわかった．

表２　友人関係と対人的疎外感の関連

項目	回答	平均値	t値
a.グループ帰属の有無	a はい(n=307) b いいえ(n=28)	49.74 55.07	1.974 p<.05
b.グループ帰属の理由			
①変わった人にみられないようにするため	a はい(n=30) b いいえ(n=305)	55.03 49.70	2.534　p<.05
②浮かないようにするため	a はい(n=60) b いいえ(n=275)	54.31 49.28	2.816　p<.05
③つまらない人にみられないようにするため	a はい(n=39) b いいえ(n=296)	55.90 49.43	3.022　p<.01
④一人ぼっちにみられたくないため	a はい(n=75) b いいえ(n=260)	55.39 48.68	3.795　p<.001
⑤相談相手がいて頼りになるため	a はい(n=137) b いいえ(n=198)	46.26 52.90	4.649　p<.001
⑥落ち込んだりしても支えてもらえるため	a はい(n=147) b いいえ(n=183)	46.10 53.42	5.091　p<.001
⑦相談がしやすいため	a はい(n=180) b いいえ(n=155)	47.21 53.63	4.367　p<.001
⑧安心して何でも話せるため	a はい(n=161) b いいえ(n=174)	45.86 54.30	5.889　p<.001
⑨学校生活が楽しくなるため	a はい(n=233) b いいえ(n=102)	48.76 53.44	2.902　p<.05

各設問に「はい」・「いいえ」で答えてもらい，各回答ごとの対人的疎外感尺度の平均点を示した．
有意差が見られる項目のみ表示した．
当該項目における回答者全体のaの回答を選択した学生の対人的疎外感尺度の平均値の検定結果を示した．

表３　昼食行動と対人的疎外感の関連

項目	回答	全体	t値
a.誰かと一緒に昼食を食べるか (N=335)	a はい(n=325) b いいえ(n=10)	49.90 59.20	2.116 p<.05
c.昼食を誰かと一緒に食べる理由(N=335)			
④ひとり取り残されるのが心細いから	a はい(n=27) b いいえ(n=308)	60.85 49.25	4.314 p<.001
d.昼食時の具体的行動(n=325)			
①食べる場所はいつも食べる相手に決めてもらう	a はい(n=62) b いいえ(n=273)	54.98 49.30	2.846 p<.01
⑤食べる相手が席に着くまで食べるのを待つ	a はい(n=179) b いいえ(n=156)	48.60 51.79	2.129 p<.05

設問に「はい」・「いいえ」で答えてもらい，各回答ごとの対人的疎外感尺度の平均点を示した．
当該項目における回答者全体のaの回答を選択した学生の対人的疎外感尺度の
平均値の検定結果を示した．

３．５　調査対象者の昼食行動と対人的疎外感の関連

昼食時の行動に関する質問項目において選択した回答間で，対人的疎外感尺度得点の平均値に有意に差が見られたものを表3に示した．

「誰かと一緒に昼食を食べる」学生（49.90）は，そうでない人（59.20）に比べ，対人的疎外感尺度の平均値が有意に低かった（t=2.116，p<.05）．また，「誰かと一緒に昼食を食べる」理由として「ひとり取り残されるのが心細いから」と回答した学生，「食べる場所はいつも食べる相手に決めてもらう」と回答した学生，昼食時に「一緒に昼食を食べる相手が席に座るまで食べるのを待つ」と回答した学生の対人疎外感尺度の平均値は，これらを選択しなかった学生の平均値に比べ有意に低かった．

４．考察

本調査では，「１人で昼食を食べる」と答えた学生は調査対象者全体の2.9%（10人）で，ごく少数であった．これらの学生のうち5人の対人的疎外感尺度の平均値（43.80）は全体の平均値（50.18）より著しく低く，残りの5人の平均値（74.60）はそれより著しく高かった．このことから，「１人で昼食を食べる」と答えた学生には2通りのタイプがあることが推測できる．すなわち，前者は自分は他者に受け入れられていると感じており，１人でいることを肯定的に捉える自律した学生，後者は他者から疎外されていると感じ，何らかの理由で他の学生との関係を築くことができないためにひとりで昼食を食べる学生である．この後者のタイプの学生の中に，今回は昼食の場所としてトイレを選択した学生はいなかったが，この点は大学構内の構造によっても行動のあり方が異なってくると思われる．本調査を実施した大学では，わざわざトイレで食事をしなくても，他者に見られずに昼食を取れる場所を大学構内に見つけることは可能であると思われる．さらに，他者からの評価が気になる学生ほど，「トイレで食事をすること」を他者に知られたくないと考える質問紙の選択肢の中から食事場所として「トイレ」を選択することそのものに抵抗があると思われ，昼食を取りに一度自宅に戻る，あるいは昼食を食べないという選択をするのではないだろうか．したがって，本調査の食事場所に対する回答が必ずしも実態を正確に把握していない可能性が考えられる．このような「他者に知られることが好ましくない」と一般的に思われがちな行動を質問紙を用いて調査することの限界でもあるが，数量的な把握も実態の理解には重要であり，今後の課題であろう．

この「他者からどのように見られているか」を気にする傾向は，今回の調査ではごく少数の「１人で昼食を食べる」学生たちの一部だけでなく，「特定のグループに帰属」し「誰かと一緒に昼食を食べる」と答えた学生の中に見られた．調査対象者全体の80%以上が「楽しいから」といった積極的理由で「特定のグループに帰属」し，大学構内では主に同じグループの友人たちと昼食を食べていたが，その一方で，約4～8%の学生は，学内では「特定のグループに帰属」し，友人と一緒に昼食を食べてはいるが，「グループに帰属している理由」として「つまらない人にみられないようにするため」や「ひとりぼっちにみられたくないため」といった他者からの評価を根拠とする理由を選択した．これらの理由を選択した学生の対人的疎外感尺度の平均値は，これらを選択しなかった学生に比べ有意に高かった．この学生たちは，「ひとりぼっちにみられたくない」ためにトイレで昼食を取るのではなく，疎外感を感じながらも一緒に行動する友人のグループに帰属し，その友人たちと行動をともにしていると言える．昼食時に「食べる場所は相手に決めてもらう」と回答した学生の対人的疎外感尺度の平均値も，そ

うでない学生の平均値より有意に高かった．2007年の調査では，昼食を共にする友人に対し極度に配慮し，儀礼的な行為を行う傾向がある学生ほど自分のグループのメンバーに「満足していない」ことが明らかになった[4]が，本調査から，そのような傾向がある学生の中には対人的疎外感が高い学生が含まれている可能性が示唆された．疎外感を感じている学生は相手から拒否されてひとりになることを恐れ，自分の意見を表明することを避け，極端に相手に行動を同調させる傾向があるのだろう．

このような大学生の傾向を堀井[9]は，「大学生になると，中・高校生に比べクラスという凝集性が弱まり，集団社会への位置づけや帰属意識が稀薄になり，孤独に陥りやすいため，身近な集団に受容されることに対して強迫的な努力と気遣いを行うことが多くなる．」と指摘したが，この傾向が強い学生にとって，大学における一見良好な対人関係の維持は負担感の強いものとなる．高校生から大学生になった途端に，彼らは集団への位置づけを自力で確保し，心理的安定を計るために同じ学科内の自然発生的「グループ」やサークル，アルバイト仲間などのさまざまな集団社会の中から，自らにふさわしいものを主体的に選択し，その社会の一員となるための積極的な態度や，新たな対人関係を構築するためのスキルを自ら獲得することを求められる[9]が，このようなスキルが未発達な学生は「1人でいない」ことを最優先した結果，さらなる不安を抱え込むことになる．2007年の調査では，「1人だと心細い」など消極的理由で「グループ」に帰属する学生は，そうでない学生に比べ，大学生活に対する不安が高いことがわかった[10]．1人に見られることを嫌悪する彼らの他者からの評価に対する不安，ひいては疎外されることに対する不安が，大学生活全体への不安に敷衍されるのだろう．

さらに，他者からの評価を極端に気にし，「友人とうまくやっていくために自己を開示しない」ことから生じる困難を，社交性やソーシャル・スキルの欠如の現れと本人や周囲が自覚しないままに不安が高じて疾病や障害に至るケースも散見された[11]．他者と適切な距離を保ち極端に自己を疲弊させることなく集団の中で生きていく技術の習得は，社会に参入するための準備期間を過ごす大学生が卒業までに達成すべき発達課題の１つでもある．大学は，このような困難を抱えた学生が，一定数でも存在することを良く理解した上で，教育，支援を行う時期に来ていると考える．自分は疎外されていると感じながら，自分の疎外感を他者に知られることや疎外されていると他者に思われることを恐れながら送る大学生活の不安定さを大学側の適切な学生支援によって解消することができるとしたら，それは未来の社会資源である人材育成という視点からも大きな意味を持つ．

実際，近年では，大学生として，また社会人として，円滑な人間関係を築いていくための力を形成・向上させるための「対人関係スキル形成」プログラムを実施したり，「学生１人ひとりに，ストレスを自己マネジメントする力」を身につけさせる「ストレス・マネジメント力形成」プログラムを実施する大学がある[12]．これらは，人間関係が作れない，居場所が作れない，更には，引きこもりや留年・退学といった事象にまで発展する危険性が懸念されるケースに有効で，成果をあげている大学も見られる．川嶋[13]は「『友人や教員との対人関係を構築することも大切』といった大学生活の心構えを教えることも，初年次教育のテーマの１つ」であると言う．これまで，中学・高校等で積極的に行われてきたような人間関係づくりのための支援を，大学側が積極的に提供していくことが必要であろう．

ただし，辻[14]は，「ランチメイト症候群」のような傾向を持つ者は，募金やボランティアなどの社会活動に積極的で，他者への信頼も高い傾向が見られたとし，これらは他者への敏感な気遣いの現れの１つであると指摘した．ある１つの特徴的な行動のみを捉えてひとりの学生の人格や学生集団全体の傾向を安易に判断することは戒めなくてはならない．また，たとえ大学内で特定のグループに帰属せず，疎外感が高い学生の場合でも，家族関係や大学外での友人関係の構築ができている可能性や，大学外の対人関係における「居場所」を確保している可能性も考えられる．本研究からその背景を明らかにすることは困難であるが，一様に本調査で尋ねた対人的疎外感の程度が，彼らの生活全般における適応に影響を与えるわけではないということは，留意するべき点であろう．

このような研究の最終的な目的は，ソーシャル・スキルの修得をはじめとする大学生の大学生活への適応を促進するためのより効果的な取り組みを構築するための手がかりを得ることであり，彼らを価値判断するためのものではない．このことを前提に，今後も彼らの集団としての実態を把握する試みを継続するとともに，学生１人ひとりの状況を個別に把握し，それぞれが必要とする支援を提供するための具体的方法の構築が喫緊の課題である．

5．結論

本研究では，最終的に大学生の大学生活への適応

の促進に繋がる手がかりを得るために，彼らの集団としての現状を把握することを目的とし，大学生の学内における昼食行動の実際と対人的疎外感の程度の関連について質問紙調査を実施した．得られた結果の分析から，大学内で昼食を共にする友人に対し極度に配慮し，儀礼的な行為を行う傾向がある学生の中には，対人的疎外感が高い学生が含まれている可能性が示唆された．このことから，対人的疎外感が高い学生は，相手から拒否され1人になることを恐れ，自分の意見を表明することを避け，極端に相手に行動を同調させる傾向がうかがえた．このような傾向が強い学生の場合，対人関係を構築するようなソーシャル・スキルが未発達である可能性が考えられ，中学・高校等で積極的に行われてきたような人間関係づくりのための支援を，大学側が積極的に提供していく必要性が示唆された．

ただし，本調査対象者においては「１人で昼食を食べる」と答えた学生の中に，新聞で報道されたような大学生がトイレで食事をする「便所飯」をする学生はいなかった．今後，現代の大学生の集団としての実態を理解するためには，彼らの実態を定量的かつ実証的に明らかにしていくことが重要であり，大学は，それらの事実に基づいて学生の状況を個別に把握した上で，学生が必要とする支援を提供するための具体的方法を構築する必要性が示唆された．

また本調査は，一部の大学生を対象にしており，これらの結果の普遍性・妥当性については，他大学の学生を対象にした調査を実施する等し，今後も引き続き検証していきたい．

謝　辞

本論文は，川崎医療福祉大学医療福祉学科 岡阪俊英さん・中見周平さん・早川修平さんの平成22年度卒業論文作成のために取得した調査結果をもとにまとめたものです．彼らの努力に敬意を表すとともに，心よりお礼申し上げます．

文　献

1）朝日新聞：朝日新聞夕刊．2009年7月6日．
2）和田秀樹：なぜ若者はトイレで「ひとりランチ」をするのか．初版，祥伝社，東京，32，2010.
3）町澤静夫：子どもの心の健康にとりくむ，19，ランチメイト症候群について．学校保健のひろば，84－87，2001.
4）Yoshida H and Taguchi T：Lunch Time Student Politics at University. *Kawasaki Medical Welfare Journal*，**13**(1)，21－29，2007.
5）宮下一博，小林利宣：青年期における「疎外感」の発達と適応との関連．教育心理学研究，**29**，11－18，1981.
6）Schimek JG and Meyer RM：Dimensions of alienation and pathology. *Psychological Reports*. **37**，727－732，1975.
7）杉浦健：2つの親和動機と対人疎外感との関連―その発達的変化―．教育心理研究，**48**，352－360，2000.
8）及川恵：大学生の精神的不適応に対する予防的アプローチ：授業の場を活用した抑うつの一次予防プログラムの改訂と効果の検討．京都大学高等教育研究，**14**，145－156，2008.
9）堀井俊章：青年期における対人不安意識の発達的変化（続報）．山形大學紀要教育科學，**13**(1)，79－94，2002.
10）Arakawa Y and Yoshida H：On the Anxiety for School Life－From the Analysis of a Questionnaire Survey towards University Students－. *Kawasaki journal of medical welfare*，**15**(2)，45－59，2010.
11）佐藤静香，畑山みさ子：女子大学生の昼食時間への不安に関する調査研究－－ランチメイト症候群検証の試み．宮城学院女子大学発達科学研究，**2**，81－87，2002.
12）株式会社NKS 能力開発センター：人間力・学生力・社会人基礎力のために－「NKSソリューションプログラム」，http://www.nks-cen.jp/school.html，2010.
13）Benesse教育開発センター：大学改革の行方．http://benesse.jp/berd/center/open/kou/view21/2005/04/04main.html，2005.
14）辻大介：友だちがいないと見られることの不安．月刊少年育成，**54**(1)，26－31，2009.

（平成23年6月24日受理）

A Study on the Interpersonal Alienation Relating to Lunchtime Politics of Japanese University Students

Yumiko ARAKAWA and Hiroko YOSHIDA

(Accepted Jun. 24, 2011)

Key words：behavior, lunchtime, university students, japanese

Correspondence to：Yumiko ARAKAWA

Kurume University
Department of Social Welfare, Kurume University School of Literature
839-8502, Fukuoka, Japan
E-Mail：arakawa_yumiko@kurume-u.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.21, No.1, 2011 127－133)